

K 7 縦走の試みとバダルピーク登頂

横山 勝 丘 (信州大学学士山岳会)

2014年夏、増本亮と長門敬明、それに私の3人はカラコルム山脈・K 7山群への遠征を行ない、未登だったK 7西峰南西稜支峰(通称 バダルピーク)の初登攀に成功した。当初の計画からすれば、下方修正のさらに下方の結果しか残せなかったが、私たち3人にとっては大変充実した遠征となった。簡単ではあるが、ここにその記録を紹介する。

(1) K 7を目指すまでの経緯

私は2005年からほぼ毎年のように、アラスカやアンデス、そしてヒマラヤに赴いては手当たり次第に様々な山にトライし続けていたのだけど、何を間違えたか、2010年前半はちょっと異常とも言えるほどのペースで大きな山を目指してしまい、その結果、雪とか氷に触りたくないと思ってしまうようになった。

最後の遠征(2010年6月カラコルム・ラトックI峰北壁)から2年近く経って、私はふたたび海外の山を目指すことにした。目的地はパタゴニア。とは言え、正直なところ私にとってのパタゴニアは、お気楽なクライミングトリップの延長線だった。ところが、いざ実際に現地に行って山を前にしてはじめて、あれ?となった。実際にフィッツロイにはトライしたけれど、もっとも簡単なルートからなんとか山頂に立つだけで終わってしまった。実際の登攀は、イメージしていたような「楽しい」というものとは程遠かった。私たちがそこでやったことは、お気楽で快適なロッククライミングでもなんでもなくて、ロッククライミングという手段を使った山登りにす

ぎなかった。そしてその行為を私は楽しむことができなかった。私が、アルパインクライマーとしていかに未熟であったかを思い知らされた瞬間でもあったけれど、ここで行われるロッククライミングの持つ可能性の大きさに気づかされたのもまた事実だった。具体的には、ふたつある。

ひとつ目は、ロッククライミングのスキルを向上させることによって、さらに一步進んだアルパインクライミングが可能になるんじゃないかということ。考えてみると、それまでの登山人生の中で、まともに岩登りをやってきたことがなかった。もちろん岩登りは大好きで、一丁前にグレードなんか追いかけたり、オンサイトの重要性を考えてみたり、時には開拓もした。一見本気でやっているように見えるし、実際に私自身もそういうつもりで取り組んでいると思っていた。

でもその行為は、アルパインに直結するようなものではなかった。アルパインとフリーという二つの行為をまったく別のものとしてしか捉えていなかった。それまでやってきたアルパインと言えば、どうしても雪や氷ばかりに目がいて、国内でそれを実践できるのは冬だけだ、という先入観を取り払えず、同時に、目指す海外の山もそういう類のものに偏っていた。単純に考えても、山は岩石によって構成されているわけだ。それなのに、その大きな山を登る手立てとして岩登りのトレーニングを積んでこなかったことに、この歳になってようやく気づいたのだった。具体的には、ここパタゴニアではグレード云々よりも「スピーディに長時間」岩を登り続ける能力

を磨く必要性があった。

ふたつ目は、縦走という概念を私自身の登山に持ち込めたこと。

二度目のパタゴニア。この時は天気が素晴らしく、山も雪が少なく絶好のコンディションだったこともあって、いろいろな成果を挙げる事が出来た。なかでも縦走は、登攀距離が長く、岩を登り続ける、というだけでも爽快なのだが、そこで要求されるものがたくさんあるという部分に惹かれた。傾斜の強い迷路のような岩稜を、半信半疑のまま道筋を探してトラバースしたかと思えば、隠れた場所に美しいクラックを見つけて、それを意気揚々と登っていくような喜びもある。かと思えば吹雪が始まって、それでも登り続けていかなきゃならないような、グレーゾーンに足を踏み入れていくというアルパイン独特の緊張感もあった。

さらにこの遊びを追求し始めると、どれだけ手垢のついた山域でも、まだ可能性はいくらでも存在するという事に気づいたのだった。つまり、どのルートを選ぼうとクライマーの自由。自分たちの好きなようにライン取りを選び、どれだけ長く登り続けても自由。2008年のデナリでは、パチンコの概念をあの山に持ち込んで充実したクライミングが実現できたけど、パタゴニアでの縦走もまた、同じ概念なのだと思わされた。

ただパタゴニアという場所が、冒険性という観点から見れば、どうしてもヒマラヤのような大きな山群と比べて見劣りするの否めなかった。快適な街をベースに、天気予報をチェックしながらボルダリングをして過ごし、天気が好転したら山に行って、天気が悪くなる前には街に戻る。まあ、大きな山に疲れていた一年目はまるで問題はなかったのだけど、時間が経つにつれて、(パタゴニア通いはそのまま継続したまま、) ふたたび大きな山に戻りたいという欲

求が高まってきた。

パタゴニアに3シーズン通う中で、そうか、パタゴニアで得たクライミングの概念をもっと大きな山に活用すれば良いじゃないか、ということに気がついた。つまりパタゴニアで行われているような岩の縦走を、ヒマラヤでやるというものだ。すぐにカラコルムの山が頭に浮かんだ。なかでもチャラクサ氷河は、まさに私がやりたいことをそのまま実現できそうな山群に思えた。

パートナーもすぐに集まった。普段から一緒に登り、国立登山研修所でも共に講師として生活を共にする、増本亮と長門敬明の二人。ストレスなく共同生活を送れる事が私にとってのパートナーの絶対条件であるのだが、そういう意味では、この二人は問題がなかった。3人ともに35歳。これまでに何度も行動を共にしているし、二人の登攀能力の高さも折り紙つきだ。

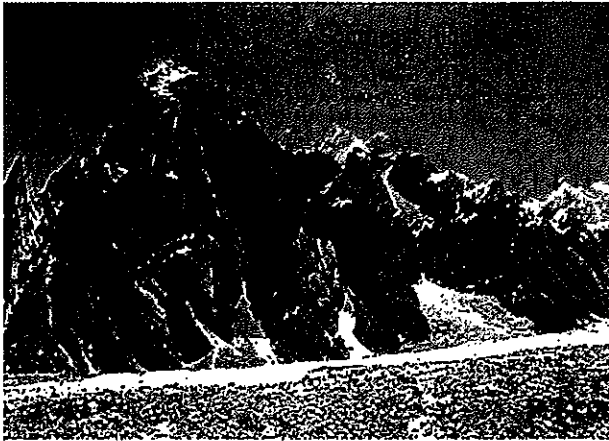
(2) ライン取り

夢は大きく持とうじゃないか！というわけで、K7西峰から未登の中央峰を経て主峰まで縦走するプランを立てた。ただ、現実的には他のサブプランもたくさん用意したうえでの出発となった。

はたしてベースキャンプにたどり着き、眼前に広がる巨大な岩塊のK7南西面をマジマジと眺めた瞬間、その計画は早々と頓挫した。今冷静に考えても、あれは凄すぎる。オリジナルの計画を実行しようとすれば、最低でも2週間は必要なんじゃないかなと思う。

ただ、他にも魅力的なプランをいくらかでも立てられるのがこの氷河の良いところで、未登の岩壁、岩稜はたくさん転がっている。ベースキャンプの真上に聳えるK7西峰南西稜支峰(ややこしいなあ)、通称バダルピークは魅力的に思えた。手付かずのライ

ンから未登の山頂に立てる可能性がまだ残されていたからだ。



TOPO

私は可能な限り長く、印象的なラインを選びたかった。それは、私たちがパタゴニアで学んだことだ。弱点を狙う時代は、ある部分では過去のものだ。できる限り強点を狙うことが、未登のピークが減った現代において、アルパインクライミングを豊かにするひとつのヒントであることは疑いの余地がない。特にパタゴニアのようなポピュラーな山城ではその傾向が顕著だ。縦走という概念は、そういった山城ではかねてより行なわれてきているが、そこではクライマーの強い意思や豊かな発想、美的感覚がより大きな重要性を持つようになる。そういう意味では、未登のピークや壁が減ってきているとは言え、むしろクライミングの選択肢は増えたと言っても良い。

ではバダルピークをどこから登ろうかと思案を巡らせた時、真っ先に頭に浮かんだのが、巨大な障壁の東端を支える長大なリッジだった。メインの壁と比較してしまうと傾斜は緩く、技術的難易度はそれほど高くはなさそうだ。しかし、恐竜の背のような形状のギャップをいくつも従え、複雑なライン取りを強いられることは容易に想像できた。

だけど俯瞰的にこの山を眺めると容易に理解できるのだけど、このピークをゴールに据えるとどうし

ても中途半端さが残る。その後ろに続くリッジが西峰の山頂まで弧を描いて延びていて、このピークは所詮、尾根上のコブ程度の存在だ。

私たちがこの場所で本当にやりたいことはなにか？

「未登」と「縦走」という二つのキーワードが後押しとなって、私たちはこのピークからWestの頂上を目指すことに決めた。岩登りからミックス、そして複雑な雪稜から雪壁。山におけるすべての能力が問われるクライミングのように思えた。代替案としては十分すぎるほどだ。

リッジそのものの長大さを鑑みて、私たちは丸一日を下部岩壁のフィックス工作に費やした。そのために用意したわけではないにせよ、氷河上に持参した6本のロープをすべてフィックスした。

(3) 本番

本番初日の朝は、暗闇残る中、まずこの6本のロープをユマーリングで登り返すことから始まった。フィックスの最高点から、必要なくなった4本のロープをホールバッグに詰めて空中に放り投げると、うまい具合に取付付近まで落ちていった（後日、これはいとも簡単に回収できた。画期的とも言えるアルパインスタイルの新手法か？）。

陽が昇れば、気温はぐんぐん上昇する。時にはTシャツで岩壁を駆け上がる。標高は5000メートル、



フィックス工作中。6ピッチ目5.11aを登攀する長門

高所でのロッククライミング経験の浅い私たちにしてみれば、常に酸欠状態で動きが鈍い。だけど花崗岩は概ね硬く、登るにつれて苔や草も少なくなった。そのままヨセミテに持ってくれば三ツ星になるのではないかと思うようなピッチもあった。時にはシビアなフィンガージャムを要求され、時には同時登攀でスピーディに高度を稼ぐ。岩登りという行為そのものを満喫した。これこそが、私たちがこの場所で一番やりたかったことだった。



登攀1日目。19ピッチ目5.10cを登攀する長門

だけど、正しいラインを見極めるのには毎度苦労した。細いリッジとは言え、一番高い部分を登っていけば良いほど単純ではない。あるときは、行き止まりかと思いきや、足元に空いたトンネルをくぐるとリッジの反対側に出た。そこには、顕著なクラックが上に向かって延びていた。また別のあるときは、ロープいっぱい懸垂下降をしてリッジの反対側に出て、そこからアックスもクランポンもないまま氷化したランペを登った。そういう、迷路を彷徨うようなトリッキーさが、縦走のもう一つの魅力でもある。

二日目の午後遅くには、それまで硬い花崗岩だったのが一変した。黒ずんだ積み木状の岩が積み重なったリッジ避け、左の側壁にラインを探る。そこは、浮石の刺さった砂の急斜面にクライミングシューズでキックステップを食らわせていくような場所で、非常に恐ろしい思いをさせられた。

ビバークポイントは比較的容易に見つけることができた。初日は完璧とも言えるほどのフラットかつ安全なスペースを確保し、翌日への英気を養うことができた。二日目は陽が暮れてもなお岩壁の中で登り続ける羽目になったが、夜10時頃になって、リッジの反対側にフラットなスペースを見つけた。ものの30分ほどの土方作業によって、非常に快適なビバーク地に早変わりした。

翌日（3日目）、リッジの複雑さはさらに増した。出だしからいきなりプアプロテクションでのシビアなハイステップを強いられる。その上のグズグズのコーナーを登ると、行き止まりとなってしまった。右に左にラインを探るが、どれも決め手に欠く。最後の選択肢、直上するシンクラックを人工登攀で登り始めると、下からは見えていなかったクラックが、奇跡的にも私たちが岩峰の頂上まで導いてくれた。足元には1,500mの空間が広がり、いきおいボルテージは最高潮となった。

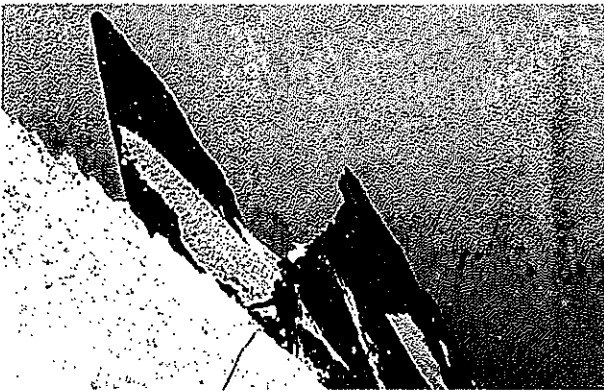
しかし、強風とともに時折小雪が舞い始めた。本当ならば今日中にバダルピークを越えてしまいたかったのだけど、目指すそのピークはまだ見えもしない。雪の斜面を削って、ビバークとした。幸いにも、今日も快適なビバーク地を見つけられた。

翌朝、天気は下り坂。のっけから懸垂下降、そしてミックスのコーナーから快適なハンドジャム。とは言え、足にはクランポンを付けたままだけ。ここでようやく頂稜に出た。

しかし、目指す山頂は広大な氷雪壁のさらに上。ベースキャンプから見上げると、この部分はさほど苦労しないように見える。しかし実際には、その距離は想像以上だった。懸垂下降、氷壁の同時登攀、ミックス壁、氷壁のトラバース、またミックス壁、そしてダメ押しの懸垂下降。そこからさらに200mほどロープを延ばした先に、バダルピークの山頂はあった。いつしか、吹雪になっていた。

3. 海外登山記録

ダウンジャケットを着ながらようやく達したバダルピークの頂上部は、いったいどこが最高地点なのかまったく見分けがつかない、いくつもの大きなボルダーで構成されていた。だいたい、そのどれか一つのでっぺんに立とうにも、弱点など見あたらない。私たちは最奥の雪のピークを頂上とし、手っ取り早く記念撮影してすぐに先を目指した。



登攀4日目。52ピッチ目、氷壁をフォローする長門



バダルピーク頂上にて。左より横山、増本、長門



登攀5日目。バダルピークからK7Westへ続く雪稜を登る長門

ふとガスの中から垣間見た西峰の山頂は、呆れるほどに遠くに感じた。山頂へと延びる雪稜は急峻で、ところどころ不安定なキノコ雪に覆われていた。一目見た瞬間に、これは一筋縄ではいかないと思った。同時登攀でどんどんロープを延ばしたいという希望は、早々と捨てざるを得なかった。辺りが暗くなるのとほぼ同時に、私たちは4日目のビバークポイントをこしらえ、テントに入った。今日は1時間以上の作業が必要だったけど、それでもフラットなスペースを確保できたのだから良しとするべきだろう。

私たちが持参した食糧は、底を尽きかけていた。食い延ばしても、プラス2日分しか確保できない。この先どんなに早く登っても、ベースキャンプまで帰るにはギリギリ、もしくは少し足りないくらいの量だ。ユマーリング中に強打したという増本の左膝はパンパンに膨れ上がり、まともに私と長門についてくるのも精いっぱいのようなのだ。雪はまだ止まない。

その晩、作戦会議を開く。当初、私と長門は、多少のリスクを負ってでも山頂を目指したいと言った。しかし増本は、この先二人が西峰の山頂を目指すとしても、最後のキャンプで待つという。様々なリスクや私たちを取り巻く状況を総合的に考え、結局は敗退することに決めた。当然ながら残念なのだけど、妥当な判断と言えはその通りだとも思う。それに、小さいながらも未登のピークに立ったという事実は、少なからず私たちの心を癒してくれていた。

翌朝、さらに3ピッチリッジを辿った先のコルから北西面に向けて下降を開始した。主にアバラコフを使い、時には岩角にスリングを巻き、ピトン・チョックを残しながら下降を続けた。心配していた上部からの落石、落雪、落水はそれほどでもなく、比較的静かな下降だった。それでも、地上を目の前にしてからはボロボロの岩屑と雪渓から溶け出した流水に悩まされた。結局、合計20回の懸垂下降をこなし、

夜の帳が下りる少し前に地上に降り立った。そこからはもうモレーンの斜面を駆け下るだけ。ベースキャンプでの食事が美味かったのは言うまでもない。

残った日程で、どこか一日でも簡単なクライミングに行こうかとも思っていたが、やはり五日間の登攀は私たちの体をボロボロにさせていた。ベースキャンプ周辺に広がるボルダーを掃除して登るような気楽な行為でお茶を濁し、8月9日にベースキャンプを離れた。

(4) 総括

結果から言えば、敗退である。でも、わりとすんなりとその結果を受け入れることができている。クライミングそのものがとても充実していたし、なにより、私たちのこれまでの登山経験とこれから先の成長の途上に、このクライミングは存在するという実感があったからだ。きっと雪とか氷に覆われた山ばかりに行っていた頃だったら、今回の山は登れなかっただろう。一方で、ヨセミテやパタゴニアしか登っていなかったとしても無理だったと思う。そしてまた、今回は敗退かもしれないけれど、その流れを断ち切ることなく継続していくことによって、私たち自身が本当に渴望することをいつかは実現できる、という期待感がある。

登る行為だけを抽出してみれば、それはパタゴニアでやっていることとさほど違いはなかった。ただ、大きな違いがふたつあって、それがこの地での縦走をより困難なものにしている。

ひとつ目は、標高も含めた山の大きさの違い。やはりここでは、酸欠のために前腕のみならず全身のポンプは早いし、頭の回転も鈍る気がする。そしてまた、その標高でのピバークを重ねなければいけない。そういうすべてに耐えながら、クライミングを続けていく。ただし、高高度と言ってもせいぜい

6,000m。酸欠しながら5.11を登るとは言え、動けない標高ではない。事前の順応を入念に行うことによって、ある程度の標高で、ある程度のグレードなら、少なからず楽しむことくらいはできるという実感を持つことができたというのも事実だ。

ただ、絶対的な隔絶感の違いは肉体的のみならず精神的にも参る。山の大きさがまるで違うし、いざという時のレスキューもなければ、エスケープルートだってあやふやだ。そういうプレッシャーの中で歩を進めていくのは緊張感がある。だからこそ楽しいのもまた事実ではあるが。

もうひとつの違いは、ヒマラヤではアルパインクライミングの全装備を持参しなければいけないということ。パタゴニアでは、街に滞在して正確な天気予報の入手が可能だ。悪天の中突っ込むというようなことをする可能性はほとんどないため、着る服は最低限。各ルートの情報も豊富なので、必要なギアだって、ある程度厳選することができる。だから、持参する荷物そのものが軽い。

一方でヒマラヤは、天気予報にしてもルートの状況にしても、正確な情報そのものがない。すべてが自分たち自身の判断にゆだねられる。そうなるといきおい、むやみやたらに荷物を減らすわけにはいなくなる。それに、山を見れば一目瞭然だが、ここではクランボンもアックスも、気合入れて揃えておかなければならない。だから、パタゴニアのように「超」がつくほどの軽量化はそもそも論外なのだ。その重荷に耐えながら、かつスピーディに登攀がこなせるようにならなければならない。

クライマーとしての厚みが必要だ。何か一つに偏って高い能力を持っていてもダメだ。アルパインクライマーとしての総合力が求められる、それがヒマラヤでの岩の縦走だという実感がある。そういう意味では、これから少なくとも10年以内の間に、ブーム

3. 海外登山記録

が訪れるかもしれない。

パタゴニアからカラコルムへの流れの中で、それまで知らなかったアルパインクライミングの様々な魅力や可能性、やらなければならないことを、身をもって知ることができた。せっかくなので、もう少しこの流れを継続させて、次回もどこか面白い登攀できれば縦走一を企画し、それに向けて全力で取り組んでいけたらと思っている。

とにもかくにも今回は、久しぶりのヒマラヤでの結果を素直に喜びたいと思う。

(5) Data

K 7 西峰南西稜支峰 (通称K 7 南西峰もしくはBadal Peak 約6100m) 初登頂

南東稜 VI 5.11c C1 M5 70°1600m+

2014年7月30日～8月3日 (7月25日に下部岩壁のフィックス作業)

長門敬明 増本亮 横山勝丘

山頂まで58ピッチ (懸垂下降と同時登攀含む)

山頂からK 7 西峰南西稜を7ピッチ進んだ後、北西面に向けて懸垂下降20回で氷河に戻る

<Gear>

60mシングルロープ×2、マスターカム#0～#3×1セット、キャメロット#0.3～#5×1セット (+α #0.75、#1、#2)、ナッツ×1セット、アイススクリュ-13cm×2本、19cm×1本、ナイフブレード×5枚、アングルピトン×3枚、アッセンダー×2セット、マイクロトラクション×2セット、60cmスリング×9本、120cmスリング×5本、カラビナ×9枚

<下降残置ギア>

ナイフブレード×3枚、アングルピトン×1枚、ナッツ×2本、他スリング

<行動概要>

7/ 4 成田空港～イスラマバード

7/ 5～7 イスラマバード・日パトラベルにて準備

7/ 8・9 ハイエースにてイスラマバード～スカルドゥへ移動

7/10 スカルドゥにて買い出し

7/11 ジープにてフーシェへ移動

7/12・13 キャラバン

7/14～18 ベースキャンプ周辺にてレスト、偵察、ボルダリング

7/19～22 Sulu Peak (約5850m) にて順応活動

7/23・24 レスト、準備

7/25 下部岩壁8ピッチの試登、6ピッチ分のフィックス作業

7/26～29 レスト、準備、下降路の偵察、ボルダリング

7/30 登攀開始 21ピッチ目終了点にてビバーク、5200m

7/31 34ピッチ目終了点にてビバーク、5500m

8/ 1 44ピッチ目終了点にてビバーク、5700m

8/ 2 バダルピーク登頂後、北に延びる稜線上にてビバーク、約6000m

8/ 3 稜線を3ピッチ進んだ後、北西面に向けて懸垂下降20回。ベースに戻る

8/ 4 レスト

8/ 5 取付まで残置物回収

8/ 6～8 レスト、ボルダリング

8/ 9 ベースキャンプ撤収、バックキャラバン

8/10 バックキャラバンを終えてスカルドゥまで

8/11・12 コースターにてスカルドゥ～イスラマバード

8/13・14 イスラマバードにて後片付け 出国

8/15 帰国

※この遠征は、公益社団法人日本山岳協会の海外登山奨励金の助成を受けて実施されました。